週刊実話

機密を握る"フィクサー"

映画グレムリンのギズモ似

「被告人は無罪。当裁判所は無罪という結論に至りました。わかりましたね」

4月26日午前10時すぎ、東京地裁で最も大きい104号法廷。資金管理団体「陸山会」の土地購入を巡り、政治資金規正法違反(虚偽記載)の罪に問われた小沢一郎・民主党元代表に対し、大善文男裁判長は念を押すように"シロ"を宣告した。

しかし、判決の内容は、限りなく"クロ"に近い灰色だった。

「小沢氏は、普段から政治資金の処理を秘書に任せっきりで虚偽記載に至る事情を詳しく知らないままだったことが幸いした。違法性をはっきりと認識していなかった可能性が最後まで残ったのです」(司法記者)

つまり小沢氏は「疑わしきは罰せず」という"刑事裁判の原則"だけで、紙一重の差で有罪を逃れたのだ。

小沢氏に向けられた疑惑を完全には払拭できないまま無罪を打ち出した司法。小沢グループは、その決定に様々な圧力をかけていたのだが、実はそれを背後で操った黒幕がいる。

「北海道出身で50歳代のX氏という人物です。本業はシステムエンジニアで、最近まで東京都千代田区にあるマンションの一室で情報セキュリティー会社を構えていたが、今春に畳んで故郷へ戻っています。映画『グレムリン』に登場するペットのギズモに似ていると自覚していたようで、会社名もそこから採用していました。無精ひげを生やしていましたが、永田町では世界的バイオリニストの葉加瀬太郎氏にもそっくりだと評判でしたよ」(小沢氏に近い衆院議員)

一介のシステムエンジニアに過ぎなかったX氏が、小沢判決にまで影響を及ぼすフィクサーになったのはなぜか。

「彼は、防衛省内ではびこっていた談合に積極的に参加し、各方面の有力者から目をかけてもらうようになった。たとえば、海上自衛隊による海外情報の調査について、防衛省はX氏しか取り扱えない計画を作って落札させています。これがバレそうになると、いったん大手に落札させて下請けにX氏の会社を入れるという便宜まで図っていた」(防衛省関係者)

X氏は、そこからさらに交友の幅を広げ、霞が関のキャリア官僚にとどまらず、

小沢無罪の仕掛け人

ギズモは
こんなにかわいいが…

国家権力"会の秘密"

東京地検や警視庁といった捜査当局にも多くのコネクションを作り、夜な夜な幹部と飲み歩くようになったという。

「新聞記者からブラックジャーナリストまで、マスコミ関係者にも食指を動かしていましたからね。まさに平成のフィクサーですよ」（全国紙社会部記者）

こんなエピソードがある。昨年1月、返済される見込みがないのに関連会社に5億5000万円を貸し付けたとして、春日電機の元社長が会社法違反（特別背任）容疑で逮捕された。

この元社長を潰そうと動

「情報屋にネタを売り込み、警視庁捜査2課を動かしたのです。さらにTBSの記者にも情報を流して、元社長が逮捕される直前にインタビューさせるよう仕向けました。当時のTBSが他のマスコミよりもしつこく元社長を追及したのは、X氏の入れ知恵です」（警視庁関係者）

このように権謀術数に長けたX氏が、小沢グループをはじめとする小沢氏の支援者をどう操り、無罪判決に影響を与えてきたのか。

話は、検察審査会が小沢氏を強制起訴した翌月の2010年11月まで遡る。当時の参院予算委員会で、森ゆうこ参院議員が検察審査会のあり方に次のように疑問を投げかけた。

『一般市民からランダムで検察審査員が選ばれる際に使われるくじ引き式のパソコンソフトが、保守点検料を含めて約6000万円かかっている。専門家に調べてもらうと、どんなに高く見積もっても1400万円で、異常に高額だ』

『パソコンソフトに不備があり、データを書き換えて検察審査会のメンバーを恣意的に選べる』

この質問のなかに出てくる、森氏が調査を依頼した専門家こそX氏だったのだ。

「2人を接近させたのは、X氏とかねてからの友人で、小沢氏の知恵袋である平野貞夫・元参院議員。森氏は、小沢氏をおとしめた検察審査会を徹底的に洗ってプレッシャーをかけるため、平野氏を介してX氏にアドバイスを求めたのです。X氏は森氏に、発注者である最高裁からパソコンソフトを入手させ、細かいレポートを作成。森氏はそれを受け取り、X氏が挙げた疑問点を国会でそのままぶつけたのです」（小沢グループ関係者）

週刊実話

大仁田厚に殴りかかる女闘士・森ゆうこ参院

森氏は、ゴリゴリの小沢シンパ。'03年には小沢氏が反対した法案の採決を阻止しようと、スカートのスリットから太ももを大胆に露出し、めくれたブラウスから下着が見えそうになりながら、プロレスラーの大仁田厚参院議員（当時）を殴ったことで名を上げた。その際、小沢氏が「我々の闘士」と絶賛したほど忠義を尽くした女傑である。

妄想レベルの仮説でかく乱

X氏と森氏の〝共闘〟はその後も続き、ついには「小沢氏を強制起訴した検察審査会は召集されておらず、架空だった」というトンデモ推理まで持ち出した。

「これもX氏の見立てですが、森氏は連日のように最高裁スタッフを参議院会館の自室に呼び、ねちっこく追及を続けていました。もちろん検察審査会に実態はあるわけで、単なる嫌がらせに近いものでした」（前出の社会部記者）

X氏自身も精力的に動いていた。今年4月には、東京地検特捜部関係者に接触していたのである。

「検察審査会が強制起訴する前に、特捜部副部長が1時間以上にわたって小沢氏を捜査した結果を説明しましたが、検察審査会のメンバーから内容について質問がなかったのです。X氏は、特捜部の内部からこれを聞きつけて『特捜部による説明を受けたというアリバイ作りのために、知識がまったくないダミーのメンバーが集められた』という推測を小沢氏の支援者に語り、司法と小沢氏側の対決をあおっていました」（小沢グループ衆院議員）

X氏の裏工作は、判決直前まで続いたという。

「判決の2週間ほど前に、西日本選出の女性参院議員、いわゆる〝小沢ガールズ〟が、ある閣僚経験者に『小沢氏は有罪になるから離れろ。さもないと次の選挙で公認しない』と言われたそうです。この閣僚経験者は、最高裁幹部と小学校から東大まで同窓の間柄で、小沢氏とは犬猿の仲。これほど確度の高い有罪情報に焦ったX氏は、それを逆手にとって判決の事前漏えいを問題視するよう小沢グループに働きかけたんです」（永田町関係者）

こうした〝工作〟が功を奏し、小沢判決は玉虫色の結末を迎えたわけだ。

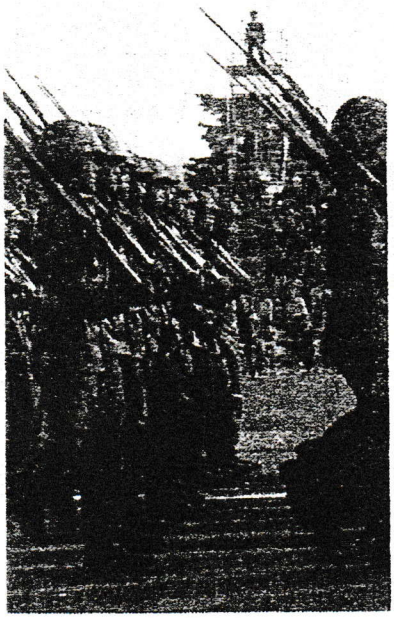
「X氏と森氏を筆頭に、小沢氏周辺からのプレッシャーは生半可なものではありませんでした。判決が、直前にやっつけで無罪に変更された印象が強いのもうなずけます。小沢氏がX氏の助けを借りて、土壇場で勝利を拾ったというのが真相ですよ」（同）

では、X氏がここまで小沢氏に肩入れする理由は何か。彼を知るジャーナリストが解説する。

「過去の私怨ですよ。かつて自民党の大物国会議員が、支援企業からワイロを受けて特許庁のシステム開発を受注させた疑惑が浮上し、東京地検特捜部が関係先を家宅捜索しました。この疑惑には、〝反小沢〟の急先鋒である民主党幹部も関与の可能性が浮上していました。この件で特捜部のネタ元になったのがX氏で、システム開発に絡むグループから外されたから裏切ったのです。ところが、特捜部がこの話を立件しなかったため、X氏が逆恨みして、小沢氏側を通じて特捜部を攻撃しているのです」

映画『グレムリン』のギズモは、最初はかわいいペットだが、真夜中にエサを与えると凶暴な怪物に変身する。X氏も、最初は大人しいシステムエンジニアだったのだろうが、霞が関と永田町の利権をエサに、いつしかフィクサーに変身したというわけか――。

一方、消費税政局を制し、首相のイスに座ろうと企む豪腕・小沢氏。〝信者〟の国会議員に加え、こんな稀代のフィクサーまで従えた男の夢が叶う日も、そう遠くはなさそうだ。



国防の機密も握る!?